

2021年5月15日 国立歴史民俗博物館 歴博映像フォーラム15

「アイヌ民族を撮影した人類学映画の歴史 - 1925年撮影八田三郎『北海道白老コタン アイヌの生活』を中心に -」 予稿

岡田 一男（東京シネマ新社）

この度は、八田三郎のフィルムを中心にアイヌ民族の初期映像史について、お話させていただく機会に、誠に感謝しております。というのも、このフィルムと初めて接して既に50年近くになりますが、きちんとした文章にまとめたことがなかったからです。そこで私が、アイヌ民族の初期映画に関わるきっかけから話を始めたいと思います。まだ私がほんの駆出しの映画人だった1970年に、現在の公益財団法人下中記念財団に、1952年にドイツで始まった学術映画の国際的収集運動で、ECフィルムと略称されているエンサイクロペディア・シネマトグラフィカが導入されることになり、そのアーカイブ設立とその後の運営に関わることになりました。設立後20年近くを経て、2000タイトルに近い16mmフィルムによる学術映像の日本での公開普及が最大の課題ではありましたが、日本の参画で期待されていたのは、むしろ日本からの、日本ならではのテーマのECフィルムへの新規提供でありました。下中記念財団は、日本で最初に本格的な百科事典を出版した平凡社の創業者、下中弥三郎の顕彰を目的とした公益法人です。当初は、設立に尽力された物理学者、茅誠司先生を中心に小中高校の先生方の科学研究に助成金を出す事業を行っていたのですが、弥三郎の後を継いだ二代目の下中邦彦さんは当時、百科事典の映像化を模索されており、私の父親、岡田桑三とその夢を語り合っていました。そこで、第二の事業として、EC日本アーカイブズを下中記念財団内部に設けて、その助言グループとして物理学者で、日本科学映画協会の理事長でもあった朝永振一郎先生を長とするEC委員会が組織され、そこで、日本からECに提供すべきテーマが討論されました。20年以上かかりましたが、それらの一つひとつを実現していくことが私の課題になったわけです。その中のテーマに、沖縄の民俗やアイヌ民族の記録がありました。アイヌ民族の記録という課題に岡田桑三は、先ず、以前から東京シネマ作品の指導学者であった北海道大学の地質学者、湊正雄先生に助言を求めました。湊先生は、学問的関心が非常に幅広く、当時は同僚であり、道半ばで世を去られた知里真志保先生の遺稿、とくにアイヌ語分類辞典動物編の刊行に努力されていました。湊先生が力説されたのは、アイヌ民族の文化変容はきわめて激しく、一時代前に記録された映画の整理から始めるべきだということでした。そして、北大には多くのアイヌ映画が整理できずに保管されている。そこから取り掛かってはどうか？ということでした。そして1930年代に北大に招かれたニール・ゴードン・マンローが講演とともに上映したフィルムを学生時代に見ての感激や衝撃を熱く語られました。ということで、下中記念財団が、1970年代初めまで北大農学部応用動物学教室に保管されていたアイヌ映像の整理を、エンサイクロペディア・シネマトグラフィカへの収録を前提にお引き受けすることになりました。これらのフィルムは可燃性の35mmフィルムや、収縮がかなり進んだ16mmフィルムでした。北大でどの位、こまかな調査が行われていたかは不明ですが、幾つかの困難な問題が解決できず、思うようには進められなかったと想像できます。

フィルムをお預かりして判明した困難に、これらのフィルムがサイレント時代のフル・フレームで撮影されたもので、いわゆるアカデミーフレームと呼ばれるトーキーフィルムの仕様でなかったことです。そのため当時はオプチカルプリンターを使用してフレーム修正をして複製プリントを作成するべきなのですが、これは作業費が高額なうえ、現像所は、作業を引き受けたりしませんでした。そのため、当初は画像の欠損を承知の上で内容のチェックをしておりました。ドイツ、ゲッティンゲンの科学映画研究所（IWF）の協力で、ハンブルクの現像所で作業して実現した35mm複製プリントが、現在、アイヌ民族博物館と北大植物園所蔵となっています。次に公開を考えると、画像に欠落ブロックがあることが問題となりました。

話は変わりますが、様々なテーマで、その始まりから今日に至る代表作品を通覧して、それらについて思考を研ぎ澄まし、明日のあるべき姿を考えだすという方法論を、私は、十代の終わりから5年間滞在したロシアで身に着けました。モスクワの北の外れにある全ソ国立映画大学監督科で劇映画演出を学んだのですが、この大学では、殆どの教科が歴史として教育されていました。ソ連ロシア文学史とか、外国映画史とか、美術史とか、その始まりから今日に至る代表例を見て行って、それらについてディスカッションを繰り返す。要するに過去に先人はどのような経験を積み重ねたのかを熟知させる訳です。その上で、先人になくユニークな発想を学生に求めていました。さらに先人を乗り越えられない者は、明日の映画界には必要ないのだよ、と教えこまれました。

多分、こうしたやり方は、この映画大学のオリジナルではなく、ヨーロッパのアカデミズムに共通するものではないでしょうか？ たまたま、1980年代の終わりに、フランスのパリで、大掛かりな科学映像イベントがあり、日本特集が組まれ、私が日本の科学映像の昨日、今日、明日を報告することになりました。そのとき、別の会場で、世界有数の映像人類学者、ジャン・ルーシュが当時、日本の国立映画アーカイブにあたる、シネマテーク・フランセーズ会長でもあったのですが、イヌイト＝エスキモー映画の初期作品から現在に至る大特集をやっていました。それは私が北海道立北方民族博物館の映像収集をお手伝いするようになる数か月前のことで、自分の報告のことで頭が一杯だったため、ルーシュに挨拶しただけで、惜しいことに、まともに視聴しなかったのですが、その上映リストは、後日の収集活動にとっても役立ちました。

それでは、学術映像の始まりについて考えたいと思います。映像人類学をはじめ学術映像のもつ機能の中には、① 時間を追って変化する現象を記録し、繰り返し再生して、情報を多人数で共有し、研究することを可能にすることや、② 急激に変容する、あるいは失われようとしている事象を記録に残すことにより後世に伝えること、③ 稀にしか起こらなかつたり、簡単には見ることの出来ない事象を手軽に見ることが出来るようにするなど、色々あります。

それらの試みは、19世紀後半のさまざまな科学技術の発展の中で、一定時間間隔で連

続的に写真を撮ることから始まりました。こうした試みのうち、馬の走行や、鳥の飛翔、人間のさまざまな動作の研究などが良く知られていますが、その一番早い、最初の試みを、イタリアの科学映画作家、ヴィルジリオ・トジは、ユネスコのためにまとめた「映画と科学研究」1977年、という小冊子の中で、フランスの天文学者、ジュールス・ジャンセンによる1874年の長崎市金比羅山で行った金星の太陽面通過観測としています。ジャンセンは、観測成功を記念するため、後日、記念碑建設の金を長崎に送っています。観測に使った記録装置の一部はパリの映画博物館に展示されています。長崎県は観測地点を史跡には指定しているものの、そこが映画発想誕生の聖地であるとは、認識していないようです。

一般的に映画の誕生は、フランス、リヨンの工業家、リュミエール兄弟による、記録されたフィルムをスクリーン上に映写した1895年のシネマトグラフとされています。彼らの功績は、ジャンセンに始まる、およそ20年にわたる先行者たちの試みを集大成して時代の要請に答えたことにあります。リュミエール兄弟は、映像人類学に貢献する二つの重要な発明を行っています。1895年のシネマトグラフは、劇映画製作への重要な第一歩ですが、世界中の様々な民族の暮らしぶりを生きいきと伝える記録手段ともなったわけです。もう一つは、1903年の最初期のカラー写真技法オートクローム・リュミエールの発明です。動画の記録手段とはなりえなかったのですが、アルベール・カーンの「地球映像資料館」の72,000点のカラー静止画が遺されました。

シネマトグラフの発明は大きな反響を呼び、彼らは世界中に操作するスタッフとシネマトグラフ機器一式を貸し出すビジネスモデルを編出しました。リヨンへの留学時代よりリュミエール兄弟の友人だった京都の染料商、稲畑勝太郎は、リュミエールの代理人として契約し、1897年、技術者やシネマトグラフ機器と共に帰国しました。シネマトグラフは、構造的に映写機を組み替えると撮影機にもなりました。リュミエール社の世界中に派遣された技術者たちは任地で上映活動の傍ら、さまざまな事物を撮影しました。こうして初めて動画として記録された明治期日本の事物の中に、最も古いアイヌの記録2シーンがあります。男性の踊りと女性の踊りです。

上映クリップ①

撮影したのは、リュミエール社のフランス人技師コンスタン・ジレルですが、残念ながら、彼は撮影をした集落名を書き記しませんでした。室蘭に行ったことは、はっきりしているのですが、つてとしてはフランスの宣教団を頼ったとされるが、それから先、何処へ向かったのか？今もって不明です。上映巡業を兼ねた旅行と思われるので、巡映ルートからの撮影地の割出に期待しています。

人類学者が、フィールド調査に映画カメラを携行する最初の試みは、英国ケンブリッジ大学、アルフレッド・コート・ハットンによる1898・99年のトレス海峡先住民人類学調査です。彼は、英国のニューマン＝ガーディア製の映画カメラを携行しました。彼らは

フィールドに7か月間滞在したが、撮影に充てられたのは最後の3日間だけでした。というのも携行したカメラは現地到着までに破損してしまい、修理に送り返さざるを得なかったのです。新しいカメラは迎えの船が届けたのでしょうか？現存するのは、わずかに呪術的な踊りと火錐による火起しの映像に過ぎません。一方、音声記録は順調にワックス・シリンダー約100本が録音され、オーストラリア国立アーカイブに保存されています。ハッドンの調査で重要なのは、随行者の中に若い内科医チャールズ・ガブリエル・セリグマンがいたことです。セリグマンは、1929年に英国王立人類学協会(RAI)会長として夫妻で来日した際、ニール・ゴードン・マンローの二風谷でのアイヌ研究に映画手段を投入することを強く推し、マンローの指導教官となりました。

初期アイヌ映画は、残存する、ほぼすべてが、外国人が記録したものです。19世紀末から20世紀初めは帝国主義の時代でした。欧米列強各国は海外に植民地を經營し、そこで得た文物を収集して博物館に陳列して、競って自らの成果を誇っていました。映画はそうした繁栄を誇示する格好のツールだったのです。またこの時代はジャポニズムの時代でもあり、日本とその文化は欧米諸国の興味の的でした。当時の西欧人がアイヌに注目したのは、アイヌが極東の人種的孤島に生きる白人種の一員であり、怒涛のごとく押し寄せる黄色人種の大波に飲み込まれようとしているという幻想があったからです。そこでの決まり文句は、「滅び行く民族」でした。昨年秋、国立映画アーカイブで、「日本のアイヌ」という短いクリップが、上映されました。

上映クリップ②

その正確な題名は「日本の滅び行く民族、アイヌ」です。現在は英国映画協会(BFI)所蔵となっていますが、もともとはスイス、イエズス会司祭、ジョアのコレクションの一部で、ドイツ語圏の信者に見せていたためドイツ語字幕版です。トップクレジットの「セリグ・ポリスコープ」は、当時シカゴに存在した製作会社です。1912年に沙流川流域で撮影されたのですが、同時期、北海道で調査活動していた人物に、シカゴ大学教授の日本学者フレデリック・スターがいます。2020年の秋、二風谷アイヌ文化博物館の調査で、このフィルムの撮影地は、平取本町の義経神社下の当時のアイヌ集落の中心部と特定されました。冒頭の字幕の菱形の一部が欠落していました。冒頭で北大が難儀された問題が露呈した実例です。画面上の切れてしまった部分に、沙流川対岸の山並みが写っており、その稜線から、撮影当時、既に亡くなっていましたが、平取のコタンコロクル=村おさ、平村ペンリウクの居宅前から沙流川方向を見た稜線との一致を二風谷アイヌ文化博物館は確認されたのです。

スターは助手に映画を撮らせていたといいますが、未だ彼と確実に関連するアイヌの映画は他に見つかっていません。スターが遺した写真との検証も未だ行われていませんが、この断片がスターの関わるものと言う可能性が非常に高まったと言えます。ここでもう一つ指摘したいことは、歴博所蔵の1930年暮れにマンローが、二風谷で撮影したクマ送りの記録フィルムに、未使用となった断片があり、その多くは平取で撮影されたもので

す。マンローはこれらのシーンについて記述を遺していませんが、私には、彼は1930年当時の平取のアイヌ集落の現状を紹介しようと記録したものと読み取れます。

さて、話が前後してしまいましたが、白老で撮影したことが確実なフィルムには、1917-18年に記録されたウクライナ出身で米国籍のユダヤ人映画機材商、ベンジャミン・ブロツキーの「ビューティフル・ジャパン」という未完成作品の一節があります。この人物は、自ら語った半生にも誇張やホラ話が入混じり、非常に悩ましいところがありますが、十代にウクライナのオデッサ港でイギリス船に忍び込んで出奔、見習い船員を数年間したあと、米国上陸に成功、サーカス団員を経て、映画館経営から、映画製作を目指しますが、成功せず、日本・中国に渡り、1910年代はじめから、横浜で映画機材商を営み、中国各地を記録した「中国の旅」と日本各地を記録した「ビューティフル・ジャパン」という、ふたつの今でいう長編記録映画を遺しています。アメリカ本土での映画製作の実績がないため、アメリカ映画史には、名が残らず、日本では、浅野総一郎率いる浅野財閥の後ろ盾で、子息浅野良三が横浜で営業した大正活映の前身となる東洋フィルム会社(TFK)の創業に参画しますが、「ビューティフル・ジャパン」制作途上で、排除・追放され、さらに後年、浅野財閥が大正活映への関与自体を自らの実績から抹殺したため、極めて限られた資料しか残っていません。しかし、中国滞在においては、彼が雇った中国人たちが、中国最初の職業映画人となったことで、中国映画史においては、肯定的な評価を得ています。

上映クリップ③

彼が横浜で撮影スタジオとした場所は、横浜の元町公園の一角、現在市営プールとなっている場所です。横浜市は、大正活映跡地であるとする記念碑を設置しています。注目したいのは、このスタジオ跡地と、横浜時代、マンローが勤務した「一般病院」が隣接と言うと大げさですが、至近に位置していることです。「一般病院」で、あるいは横浜滞在の外国人コミュニティーで、ブロツキーとマンローとに交流があった可能性は十分にあるかと思っています。

「ビューティフル・ジャパン」という題名ですが、まず何故「美しき日本」としないのか？ これはブロツキー追放後、後を引継いだトーマス栗原による「美しき日本」との関連性が判断できないからです。トーマス栗原による「美しき日本」は大正活映直営館だった浅草千代田館の上映予定告知をもって、彼の作品リストに加えられているのですが、上映されたという証拠は見つかっていません。当時は、複数の映画雑誌が発行されており、載っていないのは、上映は実際には行われなかったと思われるのです。

さて、ブロツキー一行の白老撮影の確実な日時は未確定ですが、撮影隊が北海道に向かう途上に青函連絡船を待つ記念写真が残っており、出演米人俳優男女を伴った大部隊だったことが判っています。7年後に撮られた八田三郎のフィルムで、重要な役割を果たした

白老のコタンコロクル(村おさ)、熊沢エカシテパら古老たちが写っています。

ようやく本題の八田三郎の「北海道白老コタン アイヌの生活」1925年撮影ですが、幾つかの点で非常に重要なフィルムです。あくまでも今日確認されているということですが、①不完全ながらも完成ネガ原版が残存していること、②日本の大学研究者が、直接関わった、③作者自身による作品構成や製作意図など明確な文字資料が残っている最も古いアイヌ民族を記録したフィルム作品です。と同時に、映画誕生から30年を経て、既にこの当時、北海道札幌には、十分な映画撮影を行える技術インフラ＝映画制作会社が営業しており、八田は、ごく当たり前の発想で映画による記録を思い立った感じで、初めて何かを行うと言った気負いが全く感じられません。

八田三郎は1865年熊本に生まれた人物で、専門は動物学です。ヤツメウナギの発生研究から出発し、動物地理学上、宗谷海峡が動物分布上の境界線となっているとする、いわゆる八田線の発見で知られています。幅広い知識の持ち主で、北大を退官した後ですが、沖縄県庁の経済官僚だった田村浩が、渋沢敬三の支援で岡書院から、「琉球共産村落の研究」を出版するにあたって、序文執筆を引受けています。1920年代半ば当時は、北大農学部教授で、農学部博物館の主任でもありました。後年、北大には総合博物館が設置されますが、現在、農学部博物館の収集資料は、北大植物園・博物館に引継がれています。

八田は、1926年に東京で第3回汎太平洋学術会議が開催されることを受け、訪れる外国からの賓客に紹介する目的で、アイヌを紹介する映画を製作することを思いました。自ら主任として管理する北大農学部博物館に展示されている陳列アイヌの物品と現実のアイヌの暮らしぶりに著しい文化変容を痛感していた八田は、白老で1925年現在のアイヌの暮らしをそのまま記録するのではなく、一時代前の、よりアイヌらしい暮らしぶりを映画により再現しようと試みたのです。

という次第で最初に完成したのは英語字幕版です。その完成後に、英語の中間字幕類を外し、日本語字幕に差し替えた日本語字幕版が製作されました。日本語版には、英語版には見当たらない白老の当時のアイヌ集落の外景が冒頭部分にあります。2000年代になって、完成原版を精査し、フィルムの製造年を示すキーコードから、外景部分のフィルムは1926年製造のフィルムで、翌年に追加撮影が行われたことが判明しました。

上映クリップ④

八田は、撮影にあたり、地元でアイヌの調査を続けていた白老郵便局長、満岡伸一を通じ、白老アイヌのコタンコロクル、熊坂エカシテパに協力を依頼しました。八田の構想を巡ってコタンの人々は協力するか否かで二分されてしまい、協力を是とする人々のみが、撮影に参加したといわれています。後年、白老町に民営のアイヌ民族博物館が創立されたとき、創立に尽力された方々は、これら協力した人々の子孫であったとも聞きました。日本語版は、丸の内の日本工業倶楽部講堂で開催された啓明会第18回講演会で公開上映され、そ

の講演集に八田自身によるフィルム内容の構成詳細と企画趣旨が掲載されています。

この八田フィルムは、八田が在籍した北大農学部応用動物学教室に、1970年代初めまで保管されていました。冒頭でも述べましたように、1970年に財団法人下中記念財団が、国際学術映画収集・公開運動、エンサイクロペディア・シネマトグラフィカを導入し、1972年に、EC フィルム収録を前提に、北大より保管されていた35mm、16mmフィルムを借出し、整理を始めました。

別に切り分けられていた英文字幕を調べたところ、日本語版ネガ原版には欠落部分があり、葬儀、千歳川における丸木舟による鮭漁などがありませんでした。1970年代後半に、EC 運動の本部にあたる、ドイツ国立科学映画研究所（IWF）の協力でドイツの現像所で複製フィルムの作成を行ったのですが、欠落部分の解決法が定まらなかったのと、財団自体の財政事情から、80年代を通じて最終処理には進みませんでした。90年代初め、予算処置がとられて、再起動した際、当時の民営のアイヌ民族博物館の情報提供で、八田が先に製作した英語版35mm ポジプリントの現存、原版欠落部分が揃っていることが判明しました。そこで、フィルムでの統合は断念して、デジタルビデオでの統合という方法を選択して、1992年に日本語版複製ネガの画像と英語版ポジ画像、双方のデジタル画像データをビデオ編集して、下中記念財団復元版を制作しました。

ざっと構成を記すと、①集落外景 ②家事（挨拶、薪運搬、子守、水汲み）、手芸（糸紡ぎ、アツトウシ織り） ③婚礼（婿入婚、炉端の儀式、結納、イナウ、祝宴） ④病気治療 ⑤葬儀（団子づくり、遺体を着物で覆い花ゴザで包む、屋外への遺体搬出、墓標運搬と葬列、埋葬・土葬と墓標） ⑥熊送り ⑦舞踊 ⑧操舟と鮭漁となります。

上映クリップ⑤

室内撮影が多いので、撮影法が不思議でしたが、当時の新聞記事によると、室内撮影は、熊坂工カシテパ宅で行われ、電灯照明が使用されました。撮影には、白老村の行政や、地元の企業、王子製紙も協力しており、照明用電源の電柱を新たに立てたり、電線引込や千歳川での撮影の便宜を提供しています。八田の撮影の5年後、1930年暮れ、二風谷で、当地のコタンコロクル、貝沢シランペノらの協力で、スコットランド人医師、N.G.マンローによるイヨマンテ（熊送り）の撮影が行われ、マンローは1930年秋から35年まで、ウエポタラ（悪霊払い）の記録を自ら16mm カメラを使用しつつ、時に35mm 撮影班も招いて撮影を続けましたが、遂に電灯照明は行えず、チセの屋根の一部を取外したり、わざわざ撮影用の屋根を葺いていないチセを用意して、太陽光で室内撮影を行わねばなりませんでした。それと比べると、1920年代半ばの白老は、はるかに恵まれていたと言えるでしょう。

上映クリップ⑥

千歳川で撮られた丸木舟の操船と離頭銚マレップによるサケ漁ですが、まず現代のアイヌが制作し、チプサンケに登場する丸木舟よりはるかに船体が薄く、軽量に出来ていること、速い流れの中でも、立ち上がって舟をあやつりつつ、的確に水中のサケを突いています。日本の行政は、アイヌにも川を遡上するサケを漁することを禁止しました。そこから多くの伝承が失われたことが、この映像から見て取れます。

北大において八田らアイヌに関心を持つ教官有志は、学部横断的な北方文化研究会を組織していました。会のとりまとめ役をしていた八田の農学部応用動物学教室の後継教授、犬飼哲夫は、1935年に、旭川近文において、当地のコタンコロクルであり、日本国有鉄道の測量技手として、天竜川沿いに建設された三信鉄道敷設にアイヌ測量隊を率いて奮闘し、信州飯田地方では今も功績が語り継がれている川村カ子トアイヌに依頼して、カ子トアイヌの父、イタキシロマによる近文の熊送りを記録しています。八田-白老-1925年、マンロー-二風谷-1930年、犬飼-近文-1935年と、5年おきの各地の熊送りの映像が遺されていることとなります。北方文化研究会は、1942年にマンローが二風谷で逝去した際、丁重な弔文を未亡人に送るとともに、大学総長に、逸散を防ぐため遺品となった映画フィルムの手許金による入手を建議しました。

第一段階の専ら外国人によって記録されたものから始まって、第二段階は八田のような日本人研究者の関与する時代となり、戦後の第三段階では、プロダクションが地域行政など、さまざまな受注で、製作を行うこと、NHKなどのテレビ番組の中で記録されることが多くなりましたが、和人の記録者が、和人の監修者を立てて行われ、アイヌは被写体という受身の形でした。第四段階として1970年代以降には、アイヌ自身の関与がより積極的になり、共同作業の形がとられるようになりました。1990年代後半に筆者は、米国スミソニアン協会のアイヌ企画展図録にアイヌ民族誌映画の発展史を概説する機会を得ましたが、その第五段階は、アイヌ自身による自民族の記録の始まりであると記しました。

家庭用のビデオカメラやスマートフォンの動画記録機能により、誰でも記録装置を持っている時代が到来しています。外国に目を向けると、カナダやアラスカ先住民は、公的支援により、自らのTV放送局を持ったり、地域の地場産業としての映像制作が行われたり、自らの見解を世界に向かって堂々と発信する先住民映像作家が出現しています。ロシアのシベリアや極北の先住民たちも、こうした先行例に刺激を受けており、北欧でもサミなど先住民が多く学ぶ大学で、映像人類学の講座が持たれています。いわゆる業界人養成のための映像教育ではなく、文化伝承や民俗学研究をしようという若者への映像リテラシー教育がこれからは、必要ではないでしょうか？

2020年、国立歴史民俗博物館、北海道大学植物園・博物館、公益財団法人アイヌ民族文化財団から国立映画アーカイブに懸案であった可燃性35mmフィルムなどの寄贈処理が行われ、相模原収蔵庫の重要文化財級の貴重フィルムとともに多くのアイヌ初期映画が保存されることになりました。国立映画アーカイブでは、戦前日本では映画館での公開上映にあたって必ず行われていた内務省検閲の記録との照合など新たな調査が始まっています。

将来、国立映画アーカイブに外部からの映像使用要請があった場合には、アイヌ民族の人権に配慮した適切な助言が得られるよう、旧所蔵者のみならず、アイヌ民族の当該居住地と繋がりのある博物館などとの連絡を利用者に義務づけることが申合わされました。確実な保存処置が重要なのは言うまでもないことですが、それらの映像情報が、如何に有効活用できるかが、明日にむかっての私たちの課題であると思います。若い世代のアイヌ民族文化の復興、発展に寄与できてはじめて、先人たちの動く映像による記録を遺した苦勞は、報われると痛感します。

これで、私の報告は終わりです。ご清聴ありがとうございました。

最終稿20210514